

フィールドワーク便り

ライジュア島の「毒」

廣瀬 崇 幹*

インドネシアのライジュア島は、行政上は東ヌサ・テンガラ州サブ・ライジュア県にある。同県はサブとライジュアという2つの島からなり、州都のクパンからおよそ200 km 離れている。クパンから船（6時間）か飛行機（45分）を使ってサブ島へ行き、さらに小型の船（3時間）に乗り継いでライジュア島まで行く。ここ2、3年でアクセスが格段に良くなり、この船は乾季にはほぼ毎日1便出るようになった。ただ、風の向きが頻繁に変わる雨季（1-4月）と7月は、海が荒れて危険なため、船はほとんど運航しない（3週間以上待たされたことがある）。

ライジュアは一周36 kmの島で、人口はお

よそ8,000人である。地方言語のサブ語がこの母語である。教育が普及し、若い人はほぼ全員がインドネシア語を話せる。しかし、島をほとんど出たことのない40歳以上の大人は、未だにサブ語しか話さない人も多い。

ライジュアでは、昔ながらの生業や社会構造が残っている。乾季にはパルミラヤシに登ってヤシ砂糖を採取する人、それを料理する人、また、海水を岩場まで運び、塩を採取する人がいる。雨季には全世帯が畑をもっていて、緑豆とソルガムを作る。加えて近年は、海藻養殖などの仕事が入るようになり、現金収入が少しずつ増えてきている。



写真1 ライジュア島の風景



写真2 パルミラヤシの木に登り、ヤシ砂糖を採取する男性

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真3 パルミラヤシのジュースを煮詰めた濃縮ヤシ砂糖

この地域は、基本的には父系社会である。父系出自のグループには *udu* (12 グループ)、*kelogo* (*udu* 内の小単位)、*appulsubidan* (*kelogo* がさらに細分化されたグループ) という3つの階層がある。土地や家畜は基本的に父親から息子へと受け継がれるが、相続人がいない(結婚していない、もしくは男の子どもがいない)場合は *appulsubidan* と呼ばれる小グループ内で話し合いがもたれるのが一般的なようである。調査村では、ひとつの *appulsubidan* はおよそ 20 世帯、*kelogo* はおよそ 80 世帯であった。各々の *kelogo* には集団を取りまとめる族長がいて、祭が行なわれる際には、設営準備をしたり家畜を殺したりといった作業を取り仕切る。

基本的には父系社会と書いたが、「婚外児(サブ語 *ana do bui pa kepue*, 木から落ちた子ども)」という例外がある。ここの社会では、未婚の女性が恋愛して子どもを孕んでも、結婚に関する同意が両家族間で得られない場合、もしくは男性側が婚資を準備できない場合、結婚は成立しない。このとき、婚外

子が誕生する。この婚外子が男の子の場合は、女性側(母親側)の *appulsubidan* から土地や財産を相続される仕組みになっている。

毒のうわさ

サブ島を初めて訪れた時のこと。「ライジュア島には毒(サブ語 *raho*)があるから近づかないほうがいい。また、食べ物を出されても食べてはいけない」という話をあちこちで聞いた。気になって掘り下げてみようとしても、それ以上の深い話は知らないという。そういわれると、何としてでも知りたくなる。しかし2年目の調査までは、全く情報を得ることができないまま終わってしまった。

3年目の調査の時、初めて毒の話を直に聞いた。舞台となる集落の人と仲良くなり、そこで一緒に暮らし始めた時であった。Aは、同じ集落に住むBからもらったご飯を食べた吐血したことがあるというのだ。「だから」彼は続けた。「この集落では、安易に人から食べ物をもらってはいけない。」

怖い、というよりも先に、胸が高鳴った。ずっと気になっていた毒の話に出会えたのだ。しかし、集落の中での人間関係に関わる繊細な問題であり、次に何をだれに聞くべきか、慎重に計画を練った。この話をむやみに広げることでトラブルを引き起こすわけにはいかない。

集落で暮らすうちに、毒を入れたとされるBの娘であるCと仲良くなった。彼女はいわゆる婚外子で、正式な父親がいない。その代わりに、市場で物売りをするなどして、母のBを積極的に助けている。あるとき、2人

で海に巻貝採取に行く機会を得たので、意を決して聞いてみることにした。過去に何があったのか、毒のことは本当なのか、何を原料として毒を作っているのか。彼女は、はじめは拒んでいたが、少しずつ、話してくれた。本当の毒はこの集落には存在しないこと、毒とは、嫉妬から始まった人間関係のねじれと、それを起こした人をかばおうとするストーリーの象徴であること。Cから聞いた話の概要は、以下のようである。

「4・5年前のこと。Bが毒を盛ったという噂は島中に広がって、大きなトラブルになった。それまでBと、娘のCはパンを売って大繁盛していたが、毒のことが取りざたされて（事件が持ち上がって）名声が大きく傷つけられた。Aが、（恐らく）BとCが仕事をしうまくいっていることに嫉妬したのだろう。

A家は、毒の問題が持ち上がる前は、夫婦が2人とも仕事で忙しく、頻繁に子どもをBに預けていた。彼らの子ども（当時4人いた）は、毎日のようにBの家でご飯をもらっていた。Bがこの状況に怒るようになり、ご飯をAの子どもたちに分けなくなった。毒を盛られたという説は、このころにAから広がっていった。

かつて、族長の家で、毒についてのAとCの討論会が開かれた。島の親戚が何百人と参加したが、この時にCが「なぜ毒があると分かっている人に自分の子どもを預け、一緒に食事をしてきたのか」と問うたところ、Aは何も答えられなかった

という。今でもAは、同じ集落内に住んではいるものの、Bと話をする間柄ではない。

毒を盛られたが、その証拠をつかめない、というAと、冤罪で名声を傷つけられた、というB親子。結局毒に関する証拠は見つからず、討論会ではAがうその告発をしたのではないかと疑われることとなった。A家族とB、Cの対立は深まったが、結局、族長のもとに和解することになった。ただし、その後の人間関係やAとBの名声を考慮して、族長が、この一件についてはこれ以上むやみに話を広げないように、と伝えており、皆それを守っている。集落外では、毒があったという噂だけが残り、それが独り歩きして、サブ島にまで伝わるようになった。この集落に親戚をもたない人は、今でも実体のない『毒』を恐れている。」

本物の毒に出会えなかったのは少し残念ではあるが、小社会における人間関係の特徴を表す事例のように思えた。

「毒」の本当の意味

日本では、一生の中で付き合う人のほとんどが一時的な関係で、嫌いな人とは距離を置くことができる。しかし、ライジュアのような小社会では、関係をもつ人のほぼ全員が島の人間であり、特に集落内の人間関係は一生続く。だから、恥も、憎しみも、悲しみも、恨みも、すべて許容し、それぞれの人が自分なりに乗り越えて生きている。そのような環

境下で、乗り越え難い憎しみが存在することは、想像がつかないほど苦痛を伴うことである。先祖代々の大切な家だから、彼らはずっとそこに住み続ける。「将来、少なくとも3代にわたってこの確執は続くだろう、私は彼らのことを許さない」と、Cは話していた。Cの表現がすべて正しいかどうかは確かではないが、彼女以外の人にもこっそり話を聞いたところでは、毒はなかったということでこの事件は大方決着をみているようである。

Aは、親戚の大工仕事があればどこへでも手伝いに行くし、*kelogo* 内で豚肉の分配が行なわれる時でも、常に頭や足といった大きな部位をもらっている。これは、族長からAが尊重されているしるしである。彼からは突っ込んだ聞き取りをすることはできなかった。なぜ、彼が私に「毒を盛られた」話をしたのか、また毒が問題となる経緯には何があったのか、定かではない。

この毒の問題に関して、大切な点がある。それは、村長や族長という偉い立場の人が、

当事者であるAやBに口止めをしていること、また、双方の事情を理解し、社会的な立場を守っているということだ。島の中で暮らす人にとって、人生の中で出会うほとんどの人が、一生の付き合いになる。集落内部の人間関係は、特に大切なのだ。そのため、集落全体で毒の汚名を被ってまで、除け者が出ないようにしているのだ。

人の名声を傷つけてしまった人間と、それを許す人間、そして、許さない人間がいる。確執は、今この瞬間、こうして文章を書いている間も続いている。この人間関係の歪みが、象徴としての「毒」であるように思える。その毒は、言説上の存在でしかなく、社会を維持するため、加害者を守るため、今も厳然と存在している。集落に長いこと住みこまなければ、このような毒の真実を知ることではできなかっただろう。私は、もはやこの場所の人間関係に交わり、人々と毒のことを決して忘れない。

市場の下には人間の頭が埋まっている

—ベナン南部における市場という磁場—

村 津 蘭*

アラダの市場

赤い埃を巻き上げて頻繁に車が駆け抜けていく。市場の日だ。西アフリカのベナン共和国、その経済首都コトヌーと北部を結ぶ貨物線の線路のあたりで、もう喧騒が始まっている。村の、町のそこここからやってきた女たちが地面に古い布を広げて、あるいは木を打ちつけた台の上に商品を並べて、声を張り上げる。

「熱いパン」「殺鼠剤」「冷たい水」

「ぼちぼち売ってる?」「高すぎる」

「マラリアに効く石鹸だよ」「最終価格」

「きれいなサンダル、500 フラン、500 フラン」

ベナン南部のアラダ市中心部にある市場は、4日に1度開かれる。賑わう市場は、多

くの人びとにとって生活の中心となっている。市場で売られる品は、食料品から日用雑貨、衣類、ラジオなどの電子機器とさまざまで、売り買いをする人びとの目的や身分も多様である。隙間なくパイナップルを詰め込んだ耕作者の車が村から到着するかと思うと、隣の大きな町から1時間かけて来るパン屋がいる。アラダの王様の妻が売る布屋があれば、ナイジェリアから来た少年が売るサンダル屋がある。今日の晩御飯のおかずを買いに来る人がいれば、首都の市場の仕入れのために来る商人もいる。その客たちに混じって、頭に商品をのせて売り子たちが歩き売る。簡易食堂や髪結い、出張仕立屋などもあるので、市場に来れば大抵の用事を片付けることが可能だ。日本でいうと商店街と問屋が混じった場所といったところだろうか。



写真1 市場の風景

破格の原価率

しかし、商品の粗利率を比べてみるとその商売の構造は日本とかなり違うことに気付く。たとえば小売業である。ローションなどの美容ケア用品とプラスチック製品の小売りをしている女性に商品の仕入れ価格を聞くと、売価の大体8割前後であった。日本の

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真 2 市場の美容品店

小売業の売上原価率は 7 割程度 [日本政策金融金庫 2014] なので、仕入れ原価が割高なのがある。

製造業や飲食業となるとその差はさらに広がる。市場で、自分で作った洗濯石鹼を販売している女性に原価を聞いたところ、売価の 7 割以上が材料費であった。東京の中小企業で生活雑貨品の製造業の場合、材料費は平均で 2 割程度 [東京都産業労働局 2014] であるので、ここでの売価に対する材料費の割合は驚くほど高い。また、簡易食堂でインゲンマメの煮物を提供している女性に材料費を聞くと、1 日の売り上げの約 9 割が材料費であった。日本で飲食業を営む場合の原価率は約 3 割程度 [日本政策金融金庫 2014] なので、やはり破格の原価率だといえる。

なぜこのような原価率で商売が成り立つのだろうか。市場でモノを売る人に聞いて感じたのは、「人件費」という発想がないということである。日本の製造業では売上原価というときには、製造の労働費用も含める。そのうえで 3 割程度の粗利を見込むので、材料費は抑えざるを得ない。しかし、ここでは多

くの人が、売り上げから材料費を引くと利益だという発想をする。どうも、自らの労働を費用とみなしてはいないようなのだ。それが破格の原価率を可能にしている。

上述の煮豆屋は、朝 2 時間かけて調理をし、6 時間程度で売り切り、1,000 フラン程度の利益を出す。私がそれを聞いて、「じゃあ時給で考えると 100 フラン強なんだね」、と言うと、彼女は怪訝そうな顔をする。彼女にとって重要なのはそんなことでなく、1 日の終わりにどれほど手元に残るかということである。なぜ時給など計算する必要があるのか、というわけだ。

生活に埋め込まれた商い

そこで、自分自身が馴らされた労働に対する発想が、ごく限られた文化に依存したものだということに気付くことになる。労働を計量可能な費用と捉え、時間単位で切り売りできるものとする発想は、労働を代替可能で匿名的なものとする社会の考えにすぎないのだと思う。ここでの商いは、匿名化するにはあまりにも生活と人間関係の中に埋め込まれている。挨拶や噂話を通して人間関係を再構築し、新しい情報を仕入れ、市場の人びとの動きを気晴らしに眺めながら値段交渉に熱中する。市場の人びとにとってその全ての過程が商いであり、モノを売り買いするという行為なのだ。

市場で売買されるのは、日常生活で目にするモノばかりではない。ベナン共和国において広く流布する在来信仰であるヴォドゥン (vodoun) は、モノと密接な関係のある信仰

であるが、特に成功や他者の失脚などを祈願して作られるボ（bo）という呪物は市場と関連が深い。ヘビの皮やコウモリの死体、銃の部品や植物の葉など、ボの作成のための材料を売る呪物コーナーは、どこの定期市の中にも大抵ある。コーナーといっても布屋や乾物屋などもその間に混じっていたりするので、夕飯の材料を買う人のすぐ傍で、人を惚れさせるためのボ、試験に合格するためのボ、誰かを病気にするためのボなどの材料が売買されていることになる。

市場という磁場

そのような呪術的な力を含め、情報や人間関係、おびただしいモノたちがやりとりされる市場が特殊な場所でないはずがないだろう。ここの人びとは、市場という場を生者の日常的な論理を超える場所であるとも想定してきた。

「賑わう市場の下には、必ず人間の頭が埋められている」、と私の知り合いは言う。「犬の頭などではだめだ、人間の頭でなければな

らない」、と。

ここでは市場を設立する時、アイザン（aizan）と呼ばれる市場のヴォドゥン神格を市場の中に赤土などを盛り上げるようにして作成する。作成にあたっては、多くのヴォドゥンの儀式同様、供儀が捧げられるが、それが人身供儀でないと効果が出ないといわれている。

人間の頭蓋骨は、ヴォドゥンの儀式の中で非常に力をもった材料だとされている。儀式の方法は祭司によって違うので、目の前に広がる市場のどこかに本当に人間の頭が埋められているかは定かではない。しかし、少なくとも賑わっている市場は、人びとにとって死者の頭を想起させるほどに強力な呪力をもった場所なのである。

またオロ（oro）と呼ばれる、風の神格の結社に属する男性に聞き取りをした際に、「今日は市場の翌日だから話せない」、と言われたことがある。結社の話と市場に何の関係があるのか問うと、「市場には死者も来るから」、という答えが返ってきた。結社内には死者も入っているため、自分が結社の話をしているのを聞かれるとまずい、ということらしい。

「死者は市場で何をしているのか」、と他の人に問うと、「モノの売り買いだよ」、と当たり前のように返事が返ってきた。死者は生者に混じり実際に売り買いをしているようだ。地元の市場に行くと身元がばれるので、死者は生前の自分を知らない遠くの市場に行くのだそうだ。そして、誰その死んだ身内を遠く離れた市場でみたという話が、時々人の口



写真3 隣町の市場の神格アイザン

囲いに神格アイザンの絵が描かれている。ヴォドゥン本体は囲いの中にある。

の端にのぼったりする。

夜に先祖の霊が歩くというのは聞いたことがあった。日中の光が明確な世界を作り出すのに比して、暗がりには論理の輪郭をぼやけさせ、他者との境界を曖昧にする。夜が死者と近づく時間であるのは頷ける気がする。しかし、ここでは夜と同じように、市場が死者を惹きつける。一体なぜなのだろう。

交換という行為が根源的にもつ魔術的な力、或いは偶発性を含んだコントロールしきれない力の存在が、市場をして生と死の境界の曖昧な場所にするのだろうか。それとも、賑わう人によって作られた非日常の空気が、死者の世界への結節点を作るのだろうか。どちらにしても、売買や交換、あるいは市場という場所に対して人びとがもっている恐れに近い感情と同時に、強烈な執着と愛着がそこ

には感じられる。市場という多くのものを惹きつける磁場は、このアンビバレントな感情によって支えられてきたのかもしれない、と思う。

「100 フラン?」「高い」「75 フランにしろ」「ふざけるな」「十分安くしてるだろ」

喧噪の中、人びとは湯立つような真剣さで値段の交渉を重ね、少し疲れたような顔をして去っていく。けれど4日後には、現実的な必要性と、埋められた何かの骨の力によって、生者も死者も惹きつけられるように市場へと戻ってくるのだ。

引用文献

- 日本政策金融公庫. 2014. 『小企業の経営指標 2014 卸売り・小売業／飲食店・宿泊業』, 1.
東京都産業労働局. 2014. 『東京都中小企業業種別経営動向調査報告書平成 26 年度調査』, 52.

カシュミール溪谷に残るいにしえの歌

井 上 春 緒*

2015 年 8 月 29 日の夕刻、私はスーフィアーナ・ムスィーキー (*Sūfīyāna Mūsīqī*) を夜通しで聴くメヘフィル (*mehfil*) という集いに参加するため、音楽家ムシュタク・サーズナワーズの運転する車でシュリーナ

ガルから南へ約 30 km 行った山の集落チャラール・エ・シャリーフへと向かっていた。街から離れた小高い山の頂にある集落に近づくにつれ、人も車もまばらになり真夏なのにひんやりとした空気が車窓の隙間から入りこ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 ノールッディーン・ヌーラーニー聖者廟

んできた。私の心はほとんど世間に知られていない音楽について調査ができることへの期待と、未知の場所で一晩過ごすことへの不安の間で揺れていた。日が落ちかけた集落の風景はそんな不安定な気分をなだめるかのようにのどかなものだった。遠くの方に屋根がとがったひときわ目をひく建造物が現れた。ヌールッディーン・ヌーラーニー聖者廟である。その夜の宴はまずそこへ参詣するところから始まった。

カシュミールのローカルな伝統音楽

15世紀のスーフィー詩人ヌールッディーン・ヌーラーニー（1377～1440）はそれまでのスーフィー詩人がペルシャ語で詩を書いたのに対し、一般民衆でも理解できるカシュミール語で詩を書いた最初期のリシ¹⁾ (*rishi*) であった。今回同行したサーズナワーズ家は

この聖者を祀るメヘフィルでスーフィアーナ・ムースイーキーの演奏を務めてきた音楽家である。

スーフィアーナ・ムースイーキーとは北インドでも特にカシュミールのシュリーナガルでのみ聴くことができるローカルな伝統音楽である。この音楽がどのように生まれ、カシュミール固有の音楽文化として継承されてきたのかについてはあまりわかっていない。しかし、カシュミールが地理的にインドとペルシャの間に位置していたことから、14世紀頃からインドに入ってきたペルシャ文化の影響をうけていることは間違いないだろう。

スーフィアーナ・ムースイーキーはもともとメヘフィルで演奏される機会が多かったが、近年では結婚式やラジオやテレビの番組の中でカシュミールを代表する古典音楽として一般の人々に向けて演奏される機会も増えてきたようだ。

インド音楽、それともペルシャ音楽

スーフィアーナ・ムースイーキーは5人編成で演奏される声楽アンサンブルである。マカーム (*maqām*) という旋律理論とターラ (*tālā*) というリズム理論に基づいたこれらの曲は、1曲完全に演奏するのに約1時間を要する。²⁾ 使用される楽器はサントウル

1) 「リシ」とは15世紀頃に現れたカシュミール人の詩人聖者たちに対する呼称である。その中でもラール・デードとヌールッディーン・ヌーラーニーは絶大な人気を誇る。彼らがヒンドゥーであったのかムスリムであったのかは議論が分かれる。

2) マカームはメロディーを奏するのに使用する音階や音の動き方を規定する理論である。また、それぞれのマカームで演奏される曲そのものを指す場合もある。基本となる12のマカームとその派生型を合わせると理論上は180あるとされる。ただしムシュタク氏曰く実際演奏されるものは40～50である。ターラはさまざまな拍子のリズム型をもつリズム理論である。北インドの古典音楽ヒンドゥスターニー音楽で使用されるものとは異なる。

(*santūr*), サーズ (*sāz*), セタール (*setār*), タブラー (*tablā*) である。

サントゥールはイランで生まれた撥で弦を叩く打弦楽器である。100本ぐらいの弦が張られており調律するのが難しい。この楽器はスーフィアーナ・ムースイーキーで使われていたのが北インドの古典音楽であるヒンドゥスターニー音楽に取り入れられ主要な弦楽器のひとつになった。³⁾ サーズは3本の弦を弓で弾く擦弦楽器であるが、微分音のコントロールなどが難しいため演奏者が少ない。⁴⁾ サーズナワーズ家の先代の家元はこの楽器の名手であったためにサーズナワーズ(サーズ奏者)と呼ばれるようになったという。セタールは3本の弦が張られ、ピックのようなものをもって弾く撥弦楽器である。イランにも同名の楽器が存在することからも、この音楽がペルシャと深いつながりのあることがわかる。タブラーは北インドを代表する打楽器である。ただしヒンドゥスターニー音楽で通常使われているものよりも大きく、1オクターブ低く調律されている。その奏法は独特でありインドのタブラーとも異なっている。⁵⁾ このように演奏される楽器ひとつとっても、こ

の音楽がインドとペルシャの両方に深く関係していることがわかっていただけるだろう。

受け継がれる音楽の伝統

スーフィアーナ・ムースイーキーはガラナーと呼ばれる血縁関係で結びついた職業的な音楽家によって継承されてきた。多くの巨匠がこの世を去った現在、3つの主要なガラナーを残すのみになっている。⁶⁾ 今回の調査では特にサーズナワーズ・ガラナーを調査の対象とした。その理由は他でもなく、かれらの音楽に惹かれたからだ。サーズナワーズ・ガラナーは2014年の2月に亡くなった先代グラーム・ムハンマド・サーズナ



写真2 サントゥール

- 3) サントゥールはカシュミール出身の音楽家シヴ・クマール・シャルマによって50年代にヒンドゥスターニー音楽に取り入れられた。当初はインド音楽特有の歌うように音程を上下させる「ミーンド」という奏法ができないという理由で聴衆に受け入れられなかった。しかし楽器や奏法の改良によってそれらの障害を克服し今では北インドを代表する弦楽器となっている。
- 4) 微分音とは半音よりもさらに細かい音程のことであり、インド音楽やペルシャ音楽ではメロディーを奏でるうえで、これらの音程を非常に重視している。スーフィアーナ・ムースイーキーではフレットをもたないサーズが唯一微分音を奏でることができる楽器である。
- 5) 特徴としてボールと呼ばれる太鼓の唱歌がヒンドゥスターニー音楽のものとは異なっていること、使われるリズム型がペルシャやアラブ起源の名称のものであることなどが挙げられる。
- 6) 3つのガラナーとはサーズナワーズ・ガラナーの他にティベットバッカール・ガラナーとカリーンバーフ・ガラナーを指す。



写真3 サーズ



写真5 タブラー



写真4 セタール

ワーズによって支えられてきた最古のガラナーである。現在の家元のムシュタクはかれらの祖先が約400年前にイランからこの音楽をもちこんだと誇らしげに語っていた。事の真相はわからないがムシュタクと2人の

弟、サビールとラフィーク、そしてムシュタクの息子カイザーが奏でる音楽は、他のガラナーの演奏よりも忠実に伝統を継承しているように聴こえた。⁷⁾

私はせっかくなので、かれらに頼んでマカームの幾つかを録音、録画させてもらった。ほとんど聴ける機会のないスーフィアーナ・ムーシーキーを録音、録画できたことに満足していた私に、ムシュタクは言った。

「もし本物のスーフィアーナ・ムーシーキーを聴きたいのならば、メヘフィルに参加するべきだ。」

夜が更けてもメヘフィルはつづく

その夜のメヘフィルは約30人の男たちが一同に会し、聖者廟の近くの家屋の一室で、飲食をともにしながら朝までスーフィアー

7) なにをもって「正統な伝統」とするかには異論があるだろう。ここではあくまで筆者の主観的意見を述べたにすぎない。ただそれを裏付ける根拠を上げるのならば、他のガラナーのようにヒンドゥスターニー音楽への傾倒がみられない点や伝統的教授法を維持している点などが挙げられる。

ナ・ムースイーキーに耳を傾ける内輪の集いであつた。男たちが水パイプを燻らせながら部屋の壁にもたれ、いにしへのスーフィー詩人の歌に耳をすませるこのようなメヘフィルはひと昔前には頻繁に開かれていたようである。映画やテレビなど人々の娯楽が増えた現在、メヘフィルの数は激減した。サーズナワーズ・ガラナーはそのような潮流の中でも伝統的なメヘフィルを維持していこうと努めているようだ。

9時頃から始まったメヘフィルでは5曲のマカームが演奏された。1曲演奏するごとに30分程度の休憩がとられ、その間食事や軽食が振舞われた。人々がゆったりと優雅に雑談しているのが印象的であつた。寝静まったこの山の集落で、メヘフィルは夜が更けても淡々とつづいていった。18世紀に書かれたスーフィアーナ・ムースイーキーに関する音楽書『歓喜の歌』(*Tirana-e Sorer*)ではそれぞれのマカームは演奏されるべき時刻、12の星宮、「風」「土」「水」「火」の4大元素と関係付けて説明されている。さらに興味深いことには、それぞれマカームは特定の病気の治療に効果があるとも書かれている。このような解釈はヒンドウスターニー音楽のラーガにも若干みられる。しかし時間や季節感が感じられなくなった現代ではそれらの規則は形骸化している。どうやらカシュミールではいまだにこれらの規則が守られているようだ。人々は音楽を単なる娯楽や芸術鑑賞の対象としてではなく、自分たちを取り囲むコスモロジーの中に位置付けているのだろうか。



写真6 メヘフィルの様子

カシュミール渓谷に残るいにしへの歌

音楽は文学や美術のように作品として残るものではない。もちろん録音技術が生まれてからはすこし事情が違ふかもしれないが、それとて100年以上前の音をわれわれに聴かせてくれるものではない。われわれができるのは、今ある歌を聴いてその中にいにしへの人の息吹を感じ取ることでしかない。もちろん私はスーフィアーナ・ムースイーキーが中世からまったく変わらず今まで伝承されてきたなどというつもりはない。むしろわれわれの予想や期待に反して、かなり新しい要素が入っているだろうし、これからも音楽文化として生き残るためにさまざまな変革をせまられることだろう。ただ音楽としての外面がいくら変わろうとも、カシュミールの人々を結びつける紐帯として暮らしや世界観に根ざした音楽であることはやめないで欲しい。そのような土地に根ざした音楽こそ人々に感動をもたらすことができるのだから。

気候変動と飢餓、紛争、“カミカズ (Kamikaze),” そしてテロに対する人々の恐怖感と怒り

大 山 修 一 *

不順な降雨と経済の落ち込み

2015年11月、一年ぶりにニジェールの首都ニアメを訪問した。ニジェールはリビアやナイジェリア、マリ、チャドといった紛争や内戦、テロの問題をもつ国に囲まれている。隣国ブルキナファソでは、2015年9月に軍部による暫定大統領の拘束事件とそれとともに市民による抗議デモと暴動も起きた。ナイジェリア北部で破壊活動をつづけているボコ・ハラムは2015年1月に国境を越え、カメルーンやチャド、そしてニジェールにも越境するようになった。日本政府外務省の海外安全情報により、ニジェールにおける日本人の活動は首都ニアメとその近隣地域に限られている。

わたしの今回の目的は、ニアメを拠点とした研究活動と環境修復活動の準備、そしてニジェール政府の環境省や家畜省、農業研究機関、ニジェール市、そしてJICAや国際機関とのネットワークをつくることにあった。このネットワークづくりは、2015年10月より着手することになった三井物産株式会社の助成による環境修復活動を開始するための準備である。

到着した後、長年の友人であるイブラヒム

とともにニアメ市内のグランマルシェやプチマルシェを歩いた。ニジェールの11月は収穫期を終え、農村も都市も経済活動が1年のなかでもっとも活発になる時期である。本来なら、道行く行商人や商品を運ぶポーター、買い物客などでごったがえし、マルシェはものすごい活気に満ちているはずである。しかし、イブラヒムは、「今年は、どうも金まわりがよくない」という。いわれてみると、たしかに、昨年までに比べて人がすくないように思えた。わたしがいつも買い物をする、ひいきの商店が扱う品数も減り、活気が足りないように感じた。

その理由をイブラヒムにたずねると、6月から9月までの雨季のあいだ雨の降り方が悪く、豪雨の頻度が増加した結果、農業生産が低下したのが一因だという。エルニーニョの影響があるのかもしれない。サヘル地域は温暖化やエルニーニョの影響により、豪雨が増えるといわれる。イブラヒムは国立気象局に勤めていることもあり、その言葉には確信があるようだった。サヘル地域の雨の降り方は地域によって大きく異なるため、作物収量の地域差は大きくなるのだが、播種時期、トウジンビエの登熟期や収穫時期の降雨不順は

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真 1 ニアメ市における大雨による家屋の
倒壊 (2012 年)

収量の低下をまねくのである。2000 年までは小雨一つまり、干ばつが問題であったが、近年では多雨が問題になることがあり、2012 年にはニジェール川の水位が上がり、ニアメ市内の一部が冠水するといった被害が出た (写真 1)。

「飢餓はすべての問題を生みだす」

「飢餓はすべての問題の根源である (Nyunwagidan matsala)」—わたしが調査をつづけているハウサの人々がよく言うことわざである。飢餓になると、農村の経済活動が停止する。ハウサの人々は日常生活のなかで「ハルクキ」という言葉を多用するが、飢餓に陥ると、この「ハルクキ」がなくなるのである。ハルクキという言葉は「動き」全般を意味するが、それは農業や牧畜、商売、出稼ぎなどの活動、人や家畜、物や金の動きを示すものであり、国内の政治や景気、経済の動向などにも通じる言葉である [大山 2015]。「イナ ハルクキ (ハルクキはどうですか)」というハウサ語のあいさつには、大阪商人の「儲かってまっか？」に近いニュアンスがある。景気がよい

ときには人や金、物は活発に動き、逆に景気の悪いときにはその動きは不活発になるのである。すべては、「動き」で表現される。

11 月から 5 月までの長い乾季のあいだ、ハウサの男性たちは積極的に村を出て、都市への出稼ぎに出かけていく。ニアメやマラディ、タウアといった国内の大都市のほか、ガルミといった小さな町での小商い、ナイジェリア北部やベナン、コートジボワールの都市における商い、ブルキナファソでの金掘りといった、さまざまな仕事に従事する。それらの元手となるのが、出身村における農業生産である。人々は農作物を販売して現金にすることによって、都市に出る交通費を捻出し、都市で販売する商品を仕入れるのである。雨の降り方による農業生産の低下は、人々の出稼ぎや経済活動に大きく影響する。降雨の不順によりハルクキが減ることは都市や農村での人々の活動が停止し、生活に困窮する者が増えていくことが予想されるのである。

作物収量の落ち込みは、農村住民の不満や苛立ちを生むことになる。ハウサの言葉では、飢餓 (nyunwa) は人々の怒り (fushi) を生むのである。農耕民は畑のちかくで放牧するフルベやトゥアレグの家畜をみただけで、牧畜民に作物損害の賠償金を求めたり、家畜を奪おうとしたりする。2015 年 8 月には、農耕民が自分の畑でウシの足跡をみつけただけで、近隣の牧畜民に 150,000CFA (3 万円) を請求した例や、11 月にウシが自分の畑のトウジンビエを食べたといって、農耕民が牧畜民に 100,000CFA を要求した例など、農耕民と牧畜民の軋轢が高まっている。



写真2 水場に集まるトゥアレグの牧夫と家畜

牧畜民も農耕民に要求されるままに賠償金を支払ったり、家畜が奪われるのを黙っているわけではない。手元にもっている剣で応戦し、反撃に出ることも増えている。牧畜民が勝手に村の井戸から水をくんだといって、農耕民が文句をいったことがきっかけで大規模な武力衝突に発展し、農耕民と牧畜民あわせて9人が死亡した事件もある。飢餓の発生は農耕民と牧畜民の関係性を悪化させ、紛争の件数が増加するとともに、その規模も大きくなり、深刻なものとなる（写真2）。

身近に潜むボコ・ハラム問題

わたしは過去の調査のなかで避けてきた問題がある。それが、ボコ・ハラムという組織に関連した社会問題である。それは現在のニジェール国内では重要な問題であるものの、首都ニアメの日常生活のなかで人々のあいだで話題に上がることは多くない。ボコ・ハラムはハウサ語で「西洋教育は罪である」を意味する。

原油価格の高騰により石油輸出の好況にわ

くナイジェリアの経済成長のなかで、開発の遅れた北部のイスラーム地域でボコ・ハラムは活動を開始したといわれる。ナイジェリア国内での問題と考えられてきたが、2015年に入ってボコ・ハラムは「Province of West Africa」（IS 西アフリカ州）と名乗って攻勢を強め、ナイジェリアやチャド、カメルーン、ニジェールの国境付近、チャド湖周辺では村の焼き討ちや村びとの殺戮を繰り返し、各政府の合同軍と交戦をつづけている [Trofimov 2015]。

ナイジェリア北東部と隣接するニジェール東部のディッファ州には避難民が流入し、2015年6月の段階で45万7,000人が食料支援を必要とし、そのうち26万人に食料が配給されたという報告がある [WFP 2015]。2015年12月現在、ディッファ州に居住する人口の3分の1以上に相当する60万人が国内避難民となり、151カ所の学校が閉鎖に追い込まれたという [Trofimov 2015]。わたしの滞在中にも、ニジェール南東部の町ボッソウがボコ・ハラムによる攻撃を受け、11軒の家屋が焼き討ちにあい、9人が死亡したというハウサ語のラジオ報道があったばかりである。

今回の滞在中、ボコ・ハラムについて、ニアメに居住する人々の意見を聞いてみた。ニアメ市内にもボコ・ハラムのメンバーがいるのではないかと警戒する人もいて、ボコ・ハラムの問題は身近に潜む問題として、大勢の人々で話しあう話題ではない。ましてや、知らない人物を相手にボコ・ハラムのことを気軽に議論するようなことはしない。イブラヒムをふくめ親しい友人たちに対して個別にイ

インタビューを試みると、みなが自分の問題として語ってくれた。

話してくれた内容には、共通性がある。ボコ・ハラムはもはやイスラームを信じるムスリムではないということだ。最初、ボコ・ハラムはジハード（聖戦）と称し、非ムスリムを攻撃したり、誘拐を繰り返してきた。しかし、近年ではムスリムをも殺すようになり、その残虐性はイスラームを信じるムスリムの姿ではなく、ボコ・ハラムは矛盾を抱えているというのである。ヤギやヒツジなどの家畜を屠るように人間の首を切り、その動画を発信しつづけるボコ・ハラムは、もはやムスリムのあるべき姿ではなく、人間の所業ではないと強く批判する。

ある女性は、ナイジェリア国境に隣接するボッソウ県に弟一家が居住しており、しばしば電話で生活ぶりを聞いている。町なかではニジェール軍の軍隊や警察が警戒態勢を敷いており、治安はいちおう保たれているという。それでも、ボコ・ハラムによる襲撃事件が発生する。ニジェール国内の町では、ふつう、日中の暑さを避け、夕暮れどきから夜遅くまで商店が営業し、行商人や買い物客が行き交うが、ボッソウ県ではボコ・ハラムの襲撃後、午後 6 時以降の夜間には外出が禁止されており、まったく外出できないという。襲撃される危険性があるため、自分の畑で農作業をすることもままならないという。ボコ・ハラムが移動手段として使うバイクの使用も禁じられている。この女性は弟家族の困窮ぶりから、ニアメから送金していると話してくれた。

ボッソウでは、政府軍は自爆テロを警戒し、ヒジャブと呼ばれるスカーフを女性が身にまとうことを禁止している。ナイジェリア北東部では女性や子どもが爆弾を体にまき、スカーフで隠すという自爆テロが頻発しているためである。この自爆テロは、ニジェールではカミカズ (*kamikaze*) と呼ばれている。フランス語読みで、カミカズである。フランスで発生したテロに対する報道を契機に、ニジェールにおいても自爆テロをカミカズと記しているが、その語源を知る人はだれもいなかった。2015 年 11 月 22 日・28 日号の『Jeune Afrique』誌のテロ特集のなかでもカミカズという表記がみられた [Groupe Jeune Afrique 2015]。このカミカズは、日本の太平洋戦争末期の神風特攻隊に由来している。インターネット上では、日本の国土、そして父母や妻、子どもを守ろうとした神風特攻隊と、破壊や殺戮などの反社会的活動を繰り返す自爆テロを同一視すべきでないという記事が多い。

ボコ・ハラムが社会を蚕食する危険性

国連開発計画 (UNDP) が 2014 年に発表した人間開発指数では、全 187 カ国のうちニジェールは最下位にあり、経済や国民生活、医療・健康、教育、女性の社会参加、どの指標もきわめて低い状態にある [UNDP 2014]。この人間開発指数を算出する根拠となったデータの一部を紹介すると、ニジェールでは 15 才から 19 才までの女性 1,000 人あたりの特殊出生数は 204.8、周産期死亡数は 10 万人あたり 590 人、乳幼児死亡率は 1,000 人あたり 63 人、5 才未満死亡率は 1,000 人

あたり 114 人、5 才未満の栄養失調は 43.9 パーセント、1 日あたりの所得が 1.25 ドル未満の人口比率 43.6 パーセント、平均寿命は男性 58.3 才、女性 58.6 才という厳しいデータが並ぶ。人間開発指数は、各国における住みやすさの指標とされることもあるから、残念ながらニジェールは世界中でもっとも住みにくい国ということになる。

2000 年から 2010 年にかけて年平均の人口増加率は 3.5 パーセントと非常に高い [World Bank 2012]。この数字は 21 年で人口が 2 倍になる驚異的なペースであり、このような人口の急速な増加は耕作地の不足、干ばつによる飢餓、貧困の問題に直結する。わたしの調査している村でも、2000 年に 280 人だったのが、2010 年には 504 人にまで増加した。

調査をつづけている農村では、食料を自給できるのは約 60 世帯のうち、2 割にも満たないのがごく普通である。この割合は雨の降り方や援助でもたらされる化学肥料や改良種子の量によって上下するものの、およそ 8 割の世帯が慢性的な飢餓のリスクを抱えているのである。最近、老齢男性の畑が息子たちに生前分与されたり、遺産相続がおこなわれたりしているが、息子が 5 人以上いるケースが多く、土地の分割では息子たちで激しい争議になる。争議の結果、父親の土地は分割されるが、息子たちが所有する畑の面積は父親の世代よりも確実に縮小している。父親の世代でも食料は自給できなかったのに、小さく分割された畑で息子たちの世代が自給できることはない。ハウサ語でタラカ (*talaka*)

と呼ばれる貧乏人が増えるのも当然である。

ニジェールは経済格差の大きな国である。ニアメの高級住宅街では豪華な邸宅が多数あり、乗用車を何台も入れることができる車庫がそなえられ、ガードマンがいつも入り口を守っている。立派なランドクルーザーやベンツをみることも多い。ニアメでは、マッカ巡礼へ行った男性（ハッジ）や女性（ハジャ）も増えている。インタビューから、ニジェールは貧しい国なのではなく、富の分布が偏っており、経済格差の拡大に問題があると話す人が多い。政治家や高級官僚の多くはサイド・ビジネスを展開する商人でもあることが多く、この少数の特権階級に富が集中する一方で、大部分の国民は食うに困りさまなのである。この格差社会にボコ・ハラムは侵入し、社会を蚕食する基盤がある。人々が日常生活でボコ・ハラムの問題に言及するのを避けるのは、だれにでもボコ・ハラムに参画する要素がニジェール国内の人々にはあるということだ。

ひとりの男性が語ってくれた。「ボコ・ハラムは、貧しい農村に住む 15 才～30 才までの若者に金を支払い、武器を渡す。定期的に給与も支払う。金払いがよく、その現金は農村で食うに困っている若者には魅力的だ。農村ではハウサ語でチゾと呼ばれる 60 代から 70 代までの長老連中が村行政をとりしきっていることが多い。しかし、チゾたちは文字を読むことも書くこともできず、町から来る行政文書を読むこともできないし、飢餓どきに文書を書いて政府に援助を求めることもできない。携帯電話を使ったり、バイクに乗っ

たりすることもできない。ラジオを使うのが精一杯だ。息子たちの世代が十分に暮らすだけの財産を残すこともできない。ボコ・ハラムは、社会に不満をもつ若者に拡大する危険性が十分にあるのだ。」

気候変動による降雨の不順と作物収量の低下、経済状況の悪化は飢餓や貧困の蔓延を引き起こす結果、ボコ・ハラムが拡大し、各地で破壊活動をつづけ、社会を混乱に導く危険性を高めている。経済格差の問題はニジェールに限った問題ではないだろう。世界は、富の公平な分配をどうすすめていくのか。われわれの眼前には、厳しい現実が横たわっている。

引用文献

大山修一. 2015. 『西アフリカ・サヘルの砂漠化に挑む—ごみ活用による緑化と飢餓克服、紛争予防』昭和堂.

Groupe Jeune Afrique. 2015. *Jeune Afrique: International Indépendant*. No. 2863. 22 au 28 Novembre 2015. Paris.

Trofimov, Y. 2015 (December 4-6). Boko Haram threat expand beyond Nigeria, *The Wall Street Journal*.

UNDP (United Nation Development Programme). 2014. *Human Development Report 2014 Sustaining Human Progress: Reducing Vulnerabilities and Building Resilience*. <<http://hdr.undp.org/en/content/human-development-report-2014>> (2015 年 12 月 4 日)

WFP (World Food Programme). 2015. *Food Security and Humanitarian Implications in West Africa and the Sahel*. No. 66 July 2015. <[http://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/Joint%20Note%20July_2015_English_FAO_WFP_14%208%202015\[4\].pdf](http://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/Joint%20Note%20July_2015_English_FAO_WFP_14%208%202015[4].pdf)> (2015 年 12 月 4 日)

World Bank. 2012. *World Development Indicators 2012*. <<http://data.worldbank.org/sites/default/files/wdi-2012-ebook.pdf>> (2015 年 12 月 4 日)

支援者との思い出

—東ネパール山間部のダカ織工房でのインタビューより—

高 道 由 子 *

私はこの夏、ネパールでダカ織という織物についての調査をした。国内情勢の影響で、生産地として有名で最も訪れたかったテラトゥム郡には、調査の終盤に 1 週間滞在することができたのみだった。それでもその短い

日々は、今回の調査期間の中で最も色鮮やかな記憶として残っている。テラトゥム郡はネパールの東側の山間に位置する。私が滞在したテラトゥムの M という町では、リンブー民族の女性に織りの文化が受け継がれている。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ダカ織とは

ダカ織とはネパールの代表的な織物で、男性用の帽子（トビ）に使われる織物として特によく知られている。ネパール人にダカ織について訊ねると、「西のパルパが有名」「東ネパールのテラトゥムやダンクタ、ダランで作られている」と、ばらばらの回答が返ってくる。現在はそれ以外にもカトマンズやその他の地域でも多く製作されている。首都近郊のダカ織は、詳細な調査は実施していないが、フェアトレード関係で製作されていることが多いようだ。私が滞在したテラトゥム郡のM町でも、過去にイギリスの団体が活動しており、ダカ織の織り手の女性に対しての支援もしていた。

支援についてのインタビューの反応

今回の調査で、ダカ織の工房を何軒かまわり、支援が入った当時のことを知る工房のオーナーたちにインタビューをした。工房の



写真1 ダカトビを被る男の子
(テラトゥムにて撮影)

オーナーたちに話を聞いていて印象的だったことは、彼らが支援についてではなく、支援者との日常的なやりとりや思い出話を中心に話をしたことである。たとえば、工房の元オーナーである女性Rは、当時の支援の様子について聞きたいと私が言うやいなや、数年前にイギリスで当時の支援者の女性と再会した話をしてくれた。Rの息子はイギリス軍に入隊しており、息子に会いに行った際につてを辿り、当時の支援者の家を訪問したようだ。

「数年前に会いにいったよ。彼女は私の訪問を本当に喜んでくれた。手作りのクッキーとお茶を自ら入れてくれてね。もう95歳になるっていうのに。」

また、別の工房のオーナーは次のように話した。

「数年前に突然ここに現れたよ。大きな籠をしょってね。もう年だからゆっくりゆっくり歩いていた。そして、久しぶりの再会をして、お互いとても嬉しかった。」

私が、再会したときではなくて、当時の支援がどのようなであったかについて聞きたいと念を押すように言うと、

「彼女（支援者の女性）は、はじめはネパール語も話せなくて、織もできなかったから教えてあげたよ。ここの椅子に座って一緒にご飯を食べた」と続けた。それから、支援の内容について何度か質問してやっと、サリーの制作用の織機をカトマンズからもってきてくれた話や、カトマンズの五つ星ホテルでダカ織の展示会を開いて、そこに連れて行ってくれた話などが出た。

私は支援について訊ねた際に、どういう支

援を団体が実施したのか、当時の支援項目を挙げてもらえるのを期待していた。しかしこの期待はよい意味で裏切られた。彼女たちは支援者と被支援者としての記憶ではなく、人間同士の情動的なつながりの思い出を語り始めたからである。もちろん私の訊ね方によって、回答がそのような側面も大いにあると思う。しかし、当時の支援者との交流を語る彼女たちの様子は、心から懐かしげで嬉しそうで、支援の内容を聞いただけでは把握できない、豊かな日常のやりとりがそこに存在していたことが明らかにみてとれた。

支援とはなにか

M町において、実際の支援はもちろんなされていて、支援される側の織り手の女性たちは支援についてとても感謝していた。一方で、なされた支援以上に、支援者個人との思い出や彼女への想いについて話す人々の姿が印象的だった。それは、この支援が人付き合いを土台になされたからではないかと考える。支援というと、一方が他方に与えられるようなイメージがなくはない。しかしこの事例では、たとえ支援というものがなくなったとしても、人付き合いとして成立するような関係が築かれ、かつそれが長年にわたって継続したことが大きいように思える。

その証拠に、支援などを目的に単発でこの地を訪れ、去っていった人については、たとえばその人がどんなに大きな支援をしたとしても支援の内容にはほとんど触れず、「私たちのことを忘れた」とだけ悲しそうに言う。支



写真2 織り手の女性
(テラトゥムで撮影)



写真3 店の様子
(テラトゥムで撮影)

援者、研究者、誰かの友人であるにかかわらず、何度も顔を出す人のことは、小さなやりとりまでとても楽しそうに話した。

このインタビューをした女性たちの情緒的態度は、当たり前といえば当たり前すぎることもかも知れないが、物事の目的や成果を中心に考えてしまいがちな私にとって、当時の思い出を楽しそうに話す彼女たちの姿は心に強く残った。

カリマンタンの怒れる人々

山 中 潤 *

調査を始めて間もなくのある日、泥炭湿地林の川をボートで進んでいると、森の中の川で水浴びをしている村人に出くわした。私は微笑んだつもりであったが、村人は水をまき散らしながら、私たちのボートに怒りの言葉を向けてきた。カメラを持った見知らぬ外国人に、自分の水浴びを邪魔された、あるいは馬鹿にされたと思ったのだろう。

もちろん私がフィールドワーカーとして未熟であったが故の出来事であるが、誰しも自分の空間に見知らぬ他人が勝手に入ってきて、自分の行動を邪魔することを良くは思わないだろう。しかしながら、インドネシア・中央カリマンタン州の泥炭地ではそのようなことが度々発生し、住民は自分たちの土地であるにもかかわらず、外部からの介入を経験してきた。

私が調査を行っていた M 村は、中央カリマンタン州カプアス県に位置し、泥炭地の上に立っている。中央カリマンタンの州面積の 17.3% を占めるこの泥炭地とは、有機物が冠水条件下で十分に分解されないままに生成した有機質土壌のことである [DNPI 2009; 嶋村 2012]。その特質故に、泥炭湿地林を農地化するには水路を掘削して排水し、泥炭を乾燥させ、地上部の植生や泥炭を燃や

して栄養分を供給する必要がある。しかし苦勞して泥炭湿地林を拓いても、泥炭は著しく貧栄養の土地である。そのため、泥炭土壌がやや薄くなり鉱物質土壌がみられる河川沿いに地域住民は住んでいたものの、泥炭湿地林



写真1 メガライスプロジェクトで掘削された泥炭地の中の排水路



写真2 燃えた泥炭湿地林

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真 3 住民の火入れによる煙



写真 5 伐採した木材を運搬する住民



写真 4 対岸が霞むほどの泥炭地火災による煙



写真 6 村の未来を担う子どもたち

は長らく人々の生活や開発の中心ではなかった。

しかしスハルト政権下の 1997 年，中央カリマンタン州の南部に分布する泥炭地では「メガライスプロジェクト (Mega Rice Project)」が実施された。これは，排水路を掘削して，泥炭地 100 万ヘクタールを潮汐灌漑によって水田として開発する計画であった。¹⁾ M 村周辺の泥炭湿地林も伐開され，排水路が建設された。なお M 村の周辺の森は，地域住民が昔から利用してきた土地である

が，法律上は国家が管理する国有林である。地域住民が自分たちの土地として，その権利を訴えることはできない。そしてそのような状況の下，政府が住民の土地に介入し，泥炭地開発のプロジェクトを行なっていった。

しかしながらこのメガライスプロジェクトは，1999 年には，当初の目的を達成できず失敗に終わってしまったことが公式に認められた。²⁾ 開発は，過剰な排水により灌漑に必要な水までも排出して，泥炭の状態を大幅に劣化させるという問題を引き起こした。ま

1) Presidential Decree No. 82/1995.

2) Presidential Decree No. 80/1999.

た、泥炭が乾燥して泥炭地火災が起きやすくなってしまった。特にエルニーニョが発生した1997年の乾季、メガライズプロジェクトエリアを含む泥炭地において大規模な火災が発生した。1997年にインドネシア全体では、化石燃料による全地球的炭素放出量の年平均値の13-40%に相当する0.81-2.57 Gtの炭素が泥炭の火災によって放出された [Page *et al.* 2002]。

M村の住民も、「1997年の火災は大きかった。そしてメガライズプロジェクトのあと、明らかに泥炭地火災が増えた」と口にしていった。M村周辺においても、泥炭地火災によって農作物が被害を受けたり、住民が林産物を採集する森が焼けたという。また、火災の煙は人々の健康にも悪影響を及ぼした。

一方、2000年代に入ると、今度は泥炭地保全の名目で介入が始まった。泥炭湿地林での住民による木材伐採が違法とされ、政府による監視の目が厳しくなった。M村の村長によると、2000年頃までは住民の80%が木材伐採を生業としていた。しかしながら、監視強化や木材の減少により、現在では20-30%の世帯が従事するに留まる。

更に2007年には、中央カリマンタン州全体で、泥炭地で火を使うことを禁止にする法律が制定された。³⁾ 住民による伝統的な焼畑農業が、泥炭の発火原因として非難されたためである。M村を含む泥炭地の住民は、焼畑農法で米や野菜を栽培してきた。泥炭が薄い場合は、泥炭を火で燃やすことによって、

下の鉱物質土壌を表面化させることができる。また植生を燃やすことによって、土壌を肥沃にし、雑草を生えにくくする。そして火入れの際には、河川を単位とした農民グループで火を監視したり、家族で火を管理することによって、他人の農地に火が移らないように注意してきた。

しかし2007年以降、「火を監視・管理できなくなった」と住民は言う。泥炭地で火を使用しているところを警察に見つかれば、処罰されてしまうからである。このことは、この法律の本来の目的、つまり泥炭地火災を防ぐことに対して、皮肉にも逆の効果を生み出している。火を監視できなくなったことで、火の拡大を引き起こしてしまっているのだ。

しかしそもそも、政府のプロジェクトで荒廃した泥炭地において、火災の原因を地域住民に押し付け、住民の生業を規制しようとするのはおかしい話である。住民からすれば、先祖代々利用してきた泥炭地を、「泥炭地開発」という名前で取られ、生業を困難にさせられたあげく、今度は逆の「泥炭地保全」という名目で土地に介入され、またもや生業を規制されている状況である。

このような状況では、冒頭の水浴びの住民同様、自分の土地に入ってきて生活の邪魔をする政府に対して、人々が怒るのも頷ける。実際にインタビューの中では、さまざまな怒りの声、嘆きの声を聞いた。「森は燃えて木は少ないし、監視が厳しい。」「河川は上流の砂金採掘で汚染されて、魚の数も減って

3) UU24/2007 tentang Penanggulangan Bencana.

いる。」「そのうえ、泥炭地での焼畑農業まで禁止されたら、どうやって食べていけばいいのか。」「しかも肥料や殺虫剤は村の行政や有力者で留まって、我々の手には届かない。」人々の怒りは、もっともである。

さて冒頭の話の続きだが、その後4時間かけて川の上流まで遡り、Uターンして村に帰り始める頃には日没に近づいていた。どうやら雲行きも怪しい。そう思っていたら、雨が降り始め、しまいには雷もなり始めた。太陽が沈むと、周りは真っ暗な泥炭地である。豪雨と雷と風と真っ暗闇の中、水面ぎりぎりを走るボート。寒さと心細さから、もしかして私は、さっきの水浴びをしていた住民を怒らせ、何か黒い力でも使わせてしまったのではないか、と考え始めた。迫りくる圧倒的な自然の中で、私が乗る小さなボートはあまりにもちっぽけで、論理では説明できない力を見せつけられた気さえたのだ。その後無事に、懐中電灯で先を照らしながら村に到着した時には、心底ほっとしたのを今でも覚えている。

話が脱線したが、このような自然豊かな泥炭湿地林や泥炭農地を、住民は伝統的に利用・管理してきた。しかし、近年になって政府がさまざまな名目で介入してきた時には、住民の力は弱く、怒りの声もむなしく、たとえば呪いや黒い力でさえかなわなかったであろう。政府の力は圧倒的で、住民は土地の法的な権利ももっていないのだから。

最後になるが、2015年の乾季にも、インドネシアのカリマンタンやスマトラの泥炭地

は大火災に見舞われた。そして年末には、気候変動枠組条約の締約国会議（COP21）で、インドネシアを含む全世界が、温室効果ガスの排出削減に向けて動き出した。このような流れの中、一体次はどのような政策にM村の住民は翻弄され、生活を規制されるのだろうか。彼らは、今度こそ怒りの声を届けることができるだろうか。そして、自分たちの土地の権利を得て、政府と対等に、泥炭地のより良い利用のあり方・保全のあり方を議論できるだろうか。

もし仮に、雷や雨を私に降らせたカリマンタンの神々がいるとするならば、今後、人々の生活と泥炭地の保全が両立されることを、彼らに祈るばかりである。

引用文献

- 嶋村鉄也. 2012. 「熱帯泥炭湿地の概観」川井秀一・水野広祐・藤田素子編『講座 生存基盤論第4巻 熱帯バイオマス社会の再生—インドネシアの泥炭湿地から』京都大学学術出版会, 103-127.
- Dewan Nasional Perubahan Iklim (DNPI). 2009. Fact Sheet—Indonesia Greenhouse Gas Emission Cost Curve, Jakarta. <<http://forestclimatecenter.org/files/2009-08-27%20Fact%20Sheet%20-%20Indonesia%20Greenhouse%20Gas%20Emission%20Cost%20Curve%20by%20Indonesia%20National%20Council%20on%20Climate%20Change.pdf>> (2014年11月24日アクセス)
- Page, S. E., F. Siegert, J. O. Rieley, H. D. V. Boehm, A. Jaya and S. Limin. 2002. The Amount of Carbon Released from Peat and Forest Fires in Indonesia during 1997, *Nature* 420(6911): 61-65.